

【国語】（第一回試験）（五〇分）（満点一〇〇点）

※文字は一画ずつ丁寧に書きなさい。

※解答に字数制限がある場合は、句読点なども一字として数えます。

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

その日、変哲もない住宅街を歩いている途中で、私は青の異変を感じた。空気が冷たくなり、影をつくら
ない自然の調光がほどこされて、あたりが暗く沈んでゆく。大通りに出た途端、鉄砲水のような雨が降り出
し、ほぼ同時に稲光をともなった爆裂音が落ちてきた。電流そのものではなく、来た、という感覚が身体
奥の極に流れ込んで、私は十数分の非日常を、まぎれもない日常として生きた。雨が上がり、空は白く膨ら
んでまた縮み、青はその縮れてできた端の余白から滲み出たのちに、やがて一面、鮮やかな回復に向かった。
青空の青に不穏のにおいが混じるこの「イ」の季節を、私は以前よりも楽しみに待つようになった。平
らかな空がいかにかりそめの状態であるのか、不意打ちのように示してくれる午後の天候の崩れに、ある種
の救いを求めていると言っているのかもしれない。

強烈な夏の陽射しと対になって頭上に迫ってくる空が、とつぜん黒々とした雲に覆われ、暗幕を下ろした
みたいに世の中が一変するさまに触れると、そのあとさらになにかが起きるのではないかとの期待感がつの
り、嵐の前ではなく後でなら穏やかになると信じていた心に、それがちよつとした破れ目をつくる。

— 1 —

このささやかな破れ目につながる日々の感覚は、あらかじめ得られるものではない。自分のアンテナを通
じて入って来た瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のないひとつの体験
であって、なにかが起こってから、あれはよい意味での「ロ」の知らせだったとするのはどこか不自然な
のだ。予報は、ときに、こちらの行動を縛り、息苦しくする。晴れわたった青空のもと街を歩いていて、す
れちがいさま、これから降りらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、何かひどく損をした気さえる。
空の青が湿り気を帯び、薄墨を掃いたように黒い雲をひろげる。「ハ」風があしもとに流れて舞いあがり、
頬をなでる。来る、と感じた瞬間に最初の雨粒が落ち、稲光とともに雷鳴が響いたとき、日常の感覚の水位
があがる。ずぶ濡れになったらどうしよう、雨宿りをして約束に遅れたらどうしようなどとはなぜか思わな
い。それを一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種の恩寵として受け
とめるのだ。

しばらくのあいだ「二」を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報
を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする。

青は不思議な色である。海の青は、手を沈めて水をすくったとたん青でなくなる。あの色は幻だといつて
もいい。しかし海は極端に色を変えたとき、幻を重い現実に変える力を持つ。海の青を怖れるのは、それを

愛するのと同程度に厳しいことなのだ。

空の青も、実は「ホ」である。天上の青はいったん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の
散乱にすぎないから、他の色を捨てたのではなく、それらといっしょになれなかった孤独な色でもある。そ
の色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない。

いつも遠い。当たり前のように遠い。それが空である。飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の
属性を失っている。遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる。空の青こそが、いちばん平凡でいちば
ん穏やかな表情を見せながら、弾かれつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示すという意味にお
いて、日常に似ていてではないか。

単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、
「ヘ」自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない。心の動きは外から見
かぎりどこまでも平坦である。内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁
を平然と剥ぎとる。そういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ。

青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙
に中和するためでもある。そのようにして中和された青は、もうこれまでの青ではない。ぽおつと青を見上
げている自分もまた、さっきまでの自分ではない。この小さな変貌の断続的な繰り返しは体験の質を高め、
破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せるのだ。

天気の前と内側の暴発を経たのちにあらわれた新しい空。雨に降られたあと、たちまち乾いた亜熱帯の
大通りを渡るために、私は目の前の歩道橋の階段をのぼりはじめた。ジケン^アは、そこで起きた。いちばん上
から、人の頭ほどの赤い生きものが、ふわりふわりと降りてきたのである。

風船だった。糸が切れ、飛翔の力を失った赤い風船。一段一段弾むようにそれは近づき、すれちがった
あともおなじリズムで降りて行く。私は足を止め、振り向いて赤の軌跡を眼で追った。貴重な青は、天を目
ざさない風船の赤にキユウシュウ^エされ、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される。青の明滅に
日常の破れ目を持つという自負と願望があつさり消し去られたことに奇妙な喜びを感じつつ、私は茫然とし
ていた。再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた。

（堀江敏幸「青空の中和のあとで」）

注1 契機……ある事を生じさせるきっかけ。

注2 恩寵……めぐみ。

注3 均衡……つり合いがとれていること。

問一 ——線部ア～オのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

— 2 —

問二 — 線部 1「青の異変」とは何か、次の に入る最も適切な部分を、文章中から十一字で書き抜いて説明しなさい。

空の 。

問三 — 線部 2「十数分の非日常」の内容として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 来た、という感覚が身体の奥の極に流れ込んできたこと。
- 2 雨があがり、空が白く膨らんでまた縮んで青になったこと。
- 3 稲光をともなった爆裂音が落ちて電流となったこと。
- 4 あたりが暗く沈んでゆき、雷雨がはげしくなったこと。

問四 イ に入る最も適切な語を、漢字で書きなさい。

問五 — 線部 3「暗幕を下ろしたみたいに世の中が一変するさま」の表現技法として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法
- 2 擬人法
- 3 比喩法
- 4 強調法

問六 ロ に入る最も適切な語を、漢字で書きなさい。

問七 ハ に入る語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 あつくらしい
- 2 さわやかな
- 3 おだやかな
- 4 ひんやりした

問八 — 線部 4「日常の感覚の水位があがる」のはどうしてか、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 雷雨でずぶ濡れにならないように注意しようと思ったから。
- 2 雷雨があがるのを待って約束に遅れてしまいそうになったから。
- 3 青空が広がるのを一瞬の仕合わせと見なすことができないから。
- 4 青を失っていた空の回復を一種のめぐみとして受け止めたから。

問九 ニ に入る最も適切な語を、文章中から一字で書き抜きなさい。

問十 ホ に入る最も適切な語を、文章中から書き抜きなさい。

問十一 — 線部 5「乱反射の幻」とは何か、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 遠くの眺め
- 2 空の属性
- 3 飛行機雲
- 4 空の青さ

問十二 ヘ に入る語として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 たまたま
- 2 もちろん
- 3 あくまで
- 4 突然

問十三 — 線部 6「生きもの」とは何か、最も適切な語を、文章中から書き抜きなさい。

問十四 この文章の内容として、正しいものには1、誤っているものには2を、それぞれ解答らんに記入しなさい。

- 1 裏面のある日常と夏の急激に変化する天候との相性は、おもいのほかいいものである。
- 2 私は梅雨明けの雷鳴や豪雨の激しさに心を打たれ、その後の青い空に感動している。
- 3 稲光とともに雷鳴が響くと、ずぶ濡れになることや雨宿りの場所を心配してしまう。
- 4 雨がやんで青空がひろがつていく光景を、私は一種の恵みとして受けとめている。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

とつぜん——いやーな音でサイレンが鳴きました。¹すると、あれほど静まり返っていたように見えた家という家から、人々が1と出てきます。そして、われ先にかけてだと、小さな山のように土をもったところにもかい、

サイレンの鳴くのがおそすぎや。²

——もう、そこまで来てるやないか。³

——おい！ あけてくれ！ わたしや、わたし！

口々にわめきながら、その中に消えていきました。⁴

そのあとの、またしーんとした夜の町に、聞いたこともないような、ひくーいなり声⁵が空からふつてきました。

「ねこ」が見上げると、キラキラ光るトリがならんで、つぎつぎに飛んできます。⁵

それから、そのトリたちが、黒いフンをどつさりした——とおもったら、そいつが落ちたむこうの町のあたりから、どえらい音がひびきわたり、一息おいて、炎がであーっ！ と音たててたちのほりました。

(たいへんだ！)

トリたちは、なにこともなかったかのように、暗い闇夜の空へ、とけるように消えていきました。⁷

(やなやつらや！)

「ねこ」が、トリたちの消えた黒い夜の空をにらみつけているうちに、炎のあがつたむこうの町のあたりでは、空にむかつて2と火柱が高まり、家々をもやしはじめ、火の幕が、どんどんひろがりました。

(あいつが、こちらがわに落ちてきたら、おおごとやぞ……)

「ねこ」がイチヨウの木からかけおりてみると、どこから出てきたのか——何びきものねこが、小さくかたまつてふるえています。

それを見ると、「ねこ」は横に建ち並ぶ家にとびこみ、かけめぐって、ねこがもういないかどうかを、たしかめはじめました。

(なんでおれは、ここでこんなことをしてるんや?)

——二……五、六……

それでも六びきが見つかりました。

そのねこたちから聞いて、「ねこ」はまたそのあたりを駆けまわり、のこっているねこがいらないかどうか、さがしました。

(……一、二、三……びきか)

動けなくなつてふるえているねこを見つけることができ、またそのねこたちにたずねることができて、もう一度あたりをさがしまわつてねこたちをあつめました。

少しむこうに川があり、橋がかかっています。「ねこ」は橋のらんかんにとび上つて、ながめわたしまし

た。

(川はばは、そんなに広くはないな。橋さえ走りわたれたら——そしてむこうの暗い町にかけこめたら……いや、何としてでも、そうするしかないぞ)

「ねこ」はまた、ねこたちが小さくかたまつているところに走りもどり、言いました。

——にげるんや！

——火イ、こわい……。

——あかん、もう……。

——何、言うてるんや！ とにかく、その橋を川向うへわたるんだ。あちらは暗いし、しずかやから、⁹まだ大丈夫。

からだがすくみ、ふるえているだけだったねこたちも、少しずつ「ねこ」のいうこと¹⁰に耳をかたむけるようになりまし。

——早く！ このままここにいたら、焼き殺されてしまうぞ！

その言葉に、ようやく十二ひきが「ついていく」といいました。

その日の夜半^アに、飛行機の爆音が近づいてきて大きくなり、その姿もぐんと大きくなつてきたのは、低空を飛びはじめたからのこと。そこで、いちばんうしろの飛行機が、何やら黒いものを、ばらまいてくれた。

そいつは、ねこたちの頭の上にも、いやーな音をたててふつてきて、いざ地面にぶちあたると、ずばーん！ ずじーん！ ずん！ ぐおん ばあーん！

といった、聞いたこともないようなはでな音で炸裂した。

ずいーん！ ずいーん！

おなかにこたえる、ものすごい音がします。

——敵機襲来！ くうしゅううう！

(洋^{ひろし}のにいちやんの声や)

——西に爆弾^イトウカ！

(隣組の、遠藤のおっちゃんや……)

なぜかも「ねこ」には、その声がだれか、わかりました。

しゅわわしゅわしゅわわわわ！

すぐ川向うにも、火の雨がふりはじめました。

ざざああああ、ぞぞぞ、ずおおおん！

音が一気に大きくなりました。

その音に、ねこたちはみんな耳^ウをフせ、音が止つても見上げるのがこわくて、走り出した足がこおりつきしました。あまりの音に、からだがすくみあがつて、家のひさし^ハの下で、ひとかたまりになり、うずくまつてしまったのです。

けれど、火はせまつてきます。ここにはもういられないぞ、でもどうしたらいい——という気もちがこみ

あけてきて、みんな同時に「ねこ」の顔を見ました。¹¹

「イ、にげなければ!」「ねこ」は、ねこたちをひきつれ、はじけたように走り出しました。

頭の上で、何かをぶちまける音。それにつづいて、しゅんしゅんしゅん!

何かが風を切って落ちてきます。

がつがつがつ! がん! ばしん!

すぐ横に落ちたかのような激しい音が、「ねこ」の足をすくませます。

(道がもえてる!)

—谷町から上本町は焼けとらへんぞオ……。

だれかが叫ぶ声がありますが、「ねこ」には、それがどの方角なのか、わかりません。

「ロ、火の見えないほうへ、火の気配のないほうへ——と走りますが、家々を燃やした火が、3と鳴る炎の輪になって、行く手をふさぎます。

おしくらまんじゅうのようにあふれ出した人々にふまれ、けとばされます。塀の上を走ろうにも、塀にも火がもえうつり、こなごなになった家と道のかけらが、火の粉と共に、どわわわっ! と、ふってきます。

「ハ、どこからあらわれたものか、今やもう、ついてくるねこは二十ぴきをこえています。

(ああ、どないしたらええんや、どっちへ走ったらええんや……)

そのときまた、炎の輪が、つむじ風に吹き上げられて、破裂したかのように四方に飛び散りました。

*

(あれ、こゝは……?)

朝、「ねこ」は、浮かんで下を見下ろしていました。

すべてが消えていました。

下に見えるものは、町だったもののくずでした。何もなくなった町を、それでも何かをさがすように、たくさんの人が歩いていました。

焼け落ちたデンチュウのそばに、たくさんのねこが、一列になつてたおれているのが見えました。

—ひ、洋、あれは……。

—にいちゃん、トージョーはんや! トージョーはん! トージョーはん!

男の子の声がしました。

(洋とにいちゃんや。おれのことを呼んだるんやな……)

「ねこ」は空を見上げました。

家々と道と町を飛び散らせた音のもとである——あの奇妙なトリは、とつくに消えています。

— 7 —

それでも「ねこ」は、一步でも二歩でも町からはなれようと、浮かんだまま走り出しました。けんめいに、走りに走ります。——

気がつくと、風のかおりがかわっていました。「ねこ」は、ようやく走る足をゆるめ、ふっと立ち止まりました。

何もなかった。

だれもいなかった。

空は、きれいに、からっぽでした。

そして、それをたしかめた「ねこ」も、ふっと、空のなかにI消えていきました……。

(今江祥智「三月十三日の夜」)

問一——線部ア「オのカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二——線部1「サイレンが鳴きました。」に使われている表現方法を書きなさい。

問三——線部2「サイレン」——線部4「その中」とは具体的に何のことか、書きなさい。

問四——線部3「もう、そこまで来てるやないか。」とありますが、何が来ているのか、文章中の三文字の語を書き抜いて答えなさい。

問五——線部5「ねこ」の名前を書きなさい。

問六——線部6「黒いフン」とは何のことか、文章中の語を書き抜いて答えなさい。

問七——線部7「とけるように消えていきました。」の説明として、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 たくさんのトリが、空の中にすい込まれていった。
- 2 たくさんのトリが空一面に広がり、空と一体化した。
- 3 空の中で分解され、姿が見えなくなった。
- 4 物音を立てず、静かに空と一体化し、消えていった。

問八 1 3 に入る最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|-----|
| 1 | こそこそ | 2 | ぼうぼう | 3 | わらわら | 4 | ごごご |
|---|------|---|------|---|------|---|-----|

— 8 —

問九 — 線部8「動けなくなつてゐるえている」のはどうしてか、次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の家を燃やされ、恐怖を感じているから。
- 2 空に出現したトリに恐怖を感じているから。
- 3 火のすさまじい勢いにおじけづいているから。
- 4 人ごみにもまれ、行く先が分からなくなったから。

問十 — 線部9「まだ大丈夫。」について、その状況説明として最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 川向こうはまだ夜で、人々は寝静まっているので気づかれる心配はない。
- 2 川向こうは火が燃えていないし、物騒なトリの姿も見えないのでまだ無事である。
- 3 橋のこちら側はまだ夜で、人々は寝静まっているので気づかれる心配はない。
- 4 橋のこちら側は火が燃えていないし、物騒なトリの姿も見えないのでまだ無事である。

問十一 — 線部10「耳をかたむけるようになりました。」とありますが、それはなぜか、次の中から最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

- 1 「ねこ」の説明には客観的な説得力があったから。
- 2 「ねこ」の並はずれた勇氣に感銘を受けたから。
- 3 「ねこ」が自分たちを探してくれたことに感謝したから。
- 4 「ねこ」の真剣な気持ちに心を打たれたから。

問十二 — イ ハに入る最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 それでも
- 2 けれど
- 3 そのとき
- 4 とにかく
- 5 そのうえ

問十三 — 線部11「みんな同時に『ねこ』の顔を見ました。」から考えられる、「みんな」が「ねこ」に寄せていた気持ちとして、最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 同情
- 2 共感
- 3 信頼
- 4 恐怖

問十四 — Iを補う語を文章中から書き抜きなさい。

問十五 「ねこ」が大きく変化した部分について、次の①と②の問いに答えなさい。

- ① 「ねこ」が大きく変化したのはどこからか、はじめの五字を書き抜きなさい。
- ② 「ねこ」はどう変化したのか、十字以内でわかりやすく説明しなさい。

三

次の問いに答えなさい。

問一 アーオの漢字で用いられている部首名を次の中から選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----------|---------|---------|---------|-----------|
| ア 積【1のぎへん | 2 にんべん | 3 かくへん | 4 こざとへん | 5 りっしんべん【 |
| イ 広【1まだれ | 2 がんだれ | 3 やまいだれ | 4 とだれ | 5 なおがしら【 |
| ウ 初【1ねへん | 2 かたなへん | 3 しめすへん | 4 ころもへん | 5 はつへん【 |
| エ 廻【1しんによ | 2 えんによ | 3 そうによ | 4 すいによ | 5 ばくによ【 |
| オ 巧【1えへん | 2 こうへん | 3 たくみ | 4 くへん | 5 とまた【 |

問二 アーオの文学作品の作者を次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| ア 『走れメロス』 | イ 『黒い雨』 | ウ 『風の又三郎』 |
| エ 『坊っちゃん』 | オ 『手袋を買いに』 | |

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|--------|
| 1 新美南吉 | 2 夏目漱石 | 3 井伏鱒二 | 4 太宰治 | 5 宮沢賢治 |
|--------|--------|--------|-------|--------|

国語(第一回) 解答用紙

合 計
※

※欄には記入しないこと

問一	エ	ア
問二		
問三		
問五		
問七		
問十		
問十三		
問四		
問六		
問八		
問九		
問十二		
問十四		
1		
2		
3		
4		
※		

二

問一	エ	ア
問二		
問三	サイレン	
問四		
問六		
問八		
問十		
問十二		
問十四		
問十五		
1		
2		
3		
問五		
問七		
問九		
問十一		
問十三		
その中		
ア		
イ		
ウ		
エ		
オ		
セ		

三

※

受験番号	氏 名
------	-----